

妹一年生　く入学準備号く（試読版）

登場人物

青城真弥（あおき　まや）……高卒の少年。
青城真奈（あおき　まな）……真弥の妹。春から玉条学園□等部三年生。
青城真理（あおき　まり）……真弥の母親。デザイナー。

そろそろ新年度を迎えようという、三月下旬。

「……これでよし、と」

部屋の中心で周りを見回して、少年は小さくつぶやいた。

都心にある高層マンション、最上階の世帯向け3LDK。

そのうちの一室が、少年の自室だった。

広さ六畳ほどのフローリングの部屋はきれいに掃除され、最低限の家具のほかは、すでに梱包された段ボールが積まれてあるだけ。本棚やクローゼットも、中はすべて取り出されている。

すっかり殺風景になってしまったが、物心ついてからずっと暮らしてきた部屋である。

少年の顔を、一抹の寂しさがよぎる。

(もう、この部屋ともお別れか……)

窓からは、都心の高層マンションが霞んで見える。そんな何気ない風景にも、柄にもなく感慨を覚えていると、

「真弥、ちよつと来てちようだい」

「あ、はい！」

母親の呼ぶ声に、少年はドアへと向かった。

青城真弥。

つい数日前に高校を卒業したばかりの、一八歳だ。

もつとも外見は、とてもそんな年には見えない。身長は一四七センチで、ぱっちりとした目元にやや厚ぼったい唇、しもぶくれの頬はほんのりと赤く、まるで昭和の婦人雑誌から抜け出してきた少女のような顔立ちだ。

体格も華奢で髭も薄く、声変わりもしていない高い声と、首筋まで伸ばした黒髪のせいで、ボーイズのシャツとジーンズを着ていてさえ、女子と見まごうほどだった。

部屋を出ると、廊下やダイニングも、真弥の部屋と同様にきれいに片付けられて、あちこちに荷造りの済んだ段ボールが置かれている。

その中で、母親は一〇人掛けのダイニングテーブルにつき、何やら難しい顔をしていた。

「どうしたの、お母さん」

「ちよつといろいろ、ね。とりあえずそこに座って」

言われたとおり、母親の向かいに座る。

真弥の母親——青城真理は、高卒の子供がいる母親にしては、ずいぶんと若々しかった。

実年齢は四〇を越しているはずだが、張りのある豊満な胸と、スレンダーな体つきはとても

そうは見えない。三〇前後、服装と表情によっては女子大生にすら間違えられるほどだった。真弥と一緒に並んで歩いて、姉と弟に——そして時には姉妹と思われてしまう。

「さて。いい知らせと悪い知らせがあるけど、どっちから聞きたい？」

「え、ええと……じゃあ、悪い知らせからで」

おいしいものは最後に残す習性を發揮して、真弥は答える。

「なら——まずはこれを、見てちょうだい」

ダイニングテーブルには、二つの住民票が並んでいた。いま住んでいる住所と、来週引越す予定になっている、新しい住所——東京都西部に位置する、館川市のものだ。

それを見て、真弥はピンときた。

「あ、もう転入届、済ませてきたんだ」

「ええ。それでほら、ここを見て」

母親はそう言つて、新しい住民票を指さす。

その爪先が置かれていたのは、真弥の年齢・性別欄。

「ええと……えっ!？」

それを見た真弥は、絶句する。

性別欄——女。

そして年齢欄も、彼の実年齢より下になっている。

「な、なに、これ……?」

「市役所に問い合わせたらね、どうも手続きの時にミスがあったみたいなの。しかもそれをもとに作られた名簿で、市立△学校への入学も決まっちゃったって……」

「う、嘘でしょ!？ ぼく、来年から大学なんだけど——」

真弥は青くなる。

今回の引越しは、もともと真弥が館川市内にある大学に進むことになったのを契機とするものだった。妹の真奈も同市内にある私立のお嬢様学校に通っているため、いつそいま住んでいるマンションを引き払って、家族三人で館川に引越そうということになったのだ。

大学に通いやすくするために引越したはずが、そのせいで大学に通えなくなつては本末転倒だ。ただでさえ大変だった大学受験、真弥が青くなるのも、当然だった。

さらに母親の言葉が、追い打ちをかける。

「それが、もう一つ問題があつてね。ほら、こっちを見て」

そういつて出されたのは、真弥が今春から通うことになっている大学の封筒。すでに封は切られ、中の書類が覗いている。

「真弥、あなた△学校のところに長期入院してたでしょ？ ちょうど、真奈が生まれる前くらいに」

「う、うん」

ちようど■年生のころに、真弥は病気で半年ほど入院していた。

微熱や倦怠感など症状としては大したこともなく、もはや病名すらも覚えていないほど当時の記憶は曖昧だ。ただ、ちようど妊娠中だった母親と会えなかったのが寂しかったことだけは、よく覚えている。

「でも、それがどうかしたの？」

「ちようど休んでいた時期の授業が、未履修になってることがわかってね。このままだと入学させられないって、大学から連絡があったのよ」

「そんな……じゃ、じゃあ、大学は……？」

「残念だけど、その単位を再履修するか、あるいは高校卒業家庭認定試験——いわゆる大検を受けてないと、入学を認められないって」

「そ、そんな……」

絶望的な表情になる真弥。

しかしここで、先ほどの母親の言葉を思い出す。

「で、いいニュースってのは……？」

「ええ。市立△学校への入学は、ママのコネがある他の学校に編入することにして、なかったことにしてもらったわ」

「ああ、よかった」

真弥は胸をなでおろし、

「じゃあ、一年間延期して、住民票とかを訂正してもらって、あとは大検を取ってから再受験すればだけってこと？」

「それがね。編入先の学校には、きちんと入学して通わないといけないの。もちろん事情は説明したんだけど、決まりは決まりだから」

「ぜ、ぜんぜんいいニュースじゃないよ、それ！」

「その代わり、学校で授業を受ければ足りない譚は再履修できるから、大検を受ける必要はなくなるわよ」

「で、でも、つまりそれって……」

「ええ」

またも怪しくなる雲行きに、言葉を失う真弥。

そんな息子に、母親はきっぱりとした口調で言った。

「真弥はこの春から、女子△学生として学校に通えるようになったってこと」

母親はまぶしいほどの笑顔になって、

「ね、いいニュースでしょ？」

「ぜ、ぜんぜん良くないよ！ それなら大検を取って——」

「残念だけど、もう決定事項よ」

母親はそういつて、隣の椅子に置いていた紙袋からファイルを取り出し、生き生きとした口調で広げ始めた。

「だから早く、いろんな準備をしないとね。ええと、こっちが入学届。あとでこれに書いてちょうだい。で、こっちが入学案内と、入学までに目を通さなくちゃいけない資料の一式ね。あ、それと学校生活に備えて揃えなくちゃいけないもののリストもいただいたから、入学までにこれを用意して——」

「……なんかお母さん、楽しそうだね」

「そ、そんなことないわよ。真弥がこんなことになって、大変だなんて……」

「……………」

真弥は不信のまなざしを向けるが、ふと目の前の入学案内書を見て、さらに驚く。

「ちよ、ちよっと待って！ 入学する私立学校って、もしかして……？」

「ええ。ママがコネがあるところって言ったら、ここしかないもの」

母親はなぜか胸を張って、

「私立・玉条学園□等部。ね、安心でしょ？」

「ぜ、ぜんぜん安心じゃないよ！」

真弥は叫んだ。

「ぼ、ぼくが、玉条の、□等部に……」

あまりのことに頭が真っ白になり、テーブルに広げられた資料を見つめる。

パンフレットの表紙には、玉条学園の制服をきた少女たちが六人並んでいた。

それぞれ冬服を着た生徒と、夏服を着た生徒に分かれている。冬服のほうはダブルボタンのイートンジャケットに、ボックスプリーツスカート。ボックスプリーツの下になっているところは、タータンチェックになっている。

ただしその色は、背の順——学年によって違う。低いほうからピンク、水色、紺。下級生はずいぶん可愛らしいデザインで、上級生は非常に上品な、大人っぽいデザインだ。

夏服はジャケットを脱ぎ、チェック柄のテープで縁取りされた丸襟のブラウスに、スカートのみ。こちらでも学年ごとに色違いで、チェック柄のサスペンダーが、ブラウスとよく似あっている。

私立のお嬢様学校らしい、おしゃれな制服。この制服を目当てに娘を入学させる親も後を絶たないほどの人気であった。

そして二〇年前にそのデザインをしたのが、当時、娘を持つセレブママたちから絶大な人気を得ていた新進気鋭の若手女兒服デザイナー・M A R R I——誰であろう、真弥の母親である

青城真理その人であった。彼女が「コネがある」と言っていたのは、そのことだったのだ。

そして、真理と玉条学園のつながりはそれだけではなく――

「ママ、どうしたの？」

透き通った高い声とともに、一人の少女がダイニングに入ってきた。

身長は一三〇センチたらず。顔立ちには真弥とよく似ていたが、こちらのほうが活発で、やや垢ぬけた印象だ。

表情は大人びていたが、服装はずいぶんと少女趣味だ。大きな丸襟のブラウスに、胸元にウサギのアップリケがついているデニムのサロペット。髪は高い位置でツインテールに結わえ、その毛先を肩に垂らしている。

青城真奈。真弥の妹で、玉条学園□等部に通っている。この春から三年生だ。

彼女は軽い足取りでやってくる、真弥の隣に座って、

「どうしたの？　うちの学校の入学届って、誰か入学するの？」

「そ、それは……」

「ええ。お兄ちゃんが入学するのよ。真奈の後輩として、ね」

「ふえっ……？」

言われて、さしもの真奈も言葉を失う。しかしすぐに、

「そっかあ！　おにいちゃん、うちの学校に通うんだあ！　えへへ、お兄ちゃんと一緒に通えるの、嬉しいなあ」

満面の笑みで言われて、真弥は怒るに怒れない。

「ま、真奈……？　その、まだ決まったわけじゃ……」

「え？　お兄ちゃん、真奈と一緒に、学校に通いたくないの？」

「い、いや、そうじゃなくて、ほら、僕が真奈と同じ学校に通うなんておかしいだろ？　本

当は高校も出てるし、なにより男なのに、こんな制服を着るなんて――」

「ぜんぜんおかしくないよ！　お兄ちゃんなら、きつとうちの制服も似合うから！」

「う……」

痛いところを突かれて、真弥は思わずよろめく。

さらに母親も、

「ええ、真弥ならきつと、女子△学生としてやっていけるわ。ふふ、真弥が玉条の制服を着てくれるなんて、楽しみだわ」

「お、お母さんまで……」

がつくりと肩を落とす真弥。

そこへ、母親が再び口調を改める。

「でもね、真弥。こうして起こっちゃったものは仕方ないし、今さらもう変えようもないんだから、いっそ楽しんでいくくらいの気持ちでいかないと、もったいないわよ。ほら、高校

を卒業した男子が、女子△学生に戻れるなんて、そうそうあることじゃないんだし」

「なくていいよ、そんなの……」

「それにね、パパも言ってたじゃない。『思った通りに進まないことなんて、世の中にはいくらでもある。その時は——』」

『その時は、たとえどんな状況でも受け入れるしかない』——だったよね」

七年前に他界した父親の言葉を思い出し、真弥は目の前のパンフレットを見る。

(どんな状況でも、受け入れる——)

母親はさらに、

「ええ。』しかしどうしても受け入れられないのなら、どんな困難を乗り越える覚悟がいる』

——そうも言ってたわね。どう？ △学校に通うのは嫌だって言ってたけど、本当に、どんな困難も乗り越える覚悟はある？」

「う……そ、それは……」

たしかに、一人にもなって△学校に——それも可愛らしい女子制服を着てお嬢様学校に通うなんて、恥ずかしくて仕方ない。

だが、そのいっぽうで——

(あの、一年生の制服を着て、学校に……)

考えると、胸が痛いほどに高鳴ってくる。

ちょうど二年前。美奈が一年生の制服を着て、それを見た母親が嬉しそうにしているのを目にしてから、ひそかに心の奥に湧きあがっていたどす黒い感情。

この制服を、着たい。

母親のデザインした女子制服を着ているところを母親に見てもらって、可愛いと褒めてもらいたい。

それは考えることさえも厭わしいほどに背德的な羨望で——だからこそ、さらに歪んだ欲望へと成長して、真弥の心の中に巣くひ、根を張っていった。

この制服を、着せられたい。

自分自身から望んで着るのではなく、命令されて、あるいは断れない状況で、むりやりに着せられたい。

強要されることを望むという、ある意味で矛盾した願望だったが、今まさにそれが叶えられようとしている。

不安と緊張、そして静かな興奮に、真弥の唇が乾く。

(ぼく、あの制服を着せられて、学校に通うんだ……)

真弥が胸を押さえて黙り込んでみると、

「じゃあ、決まりね。学校にも、そう伝えておくわ。真弥も女子△学生になりたいみたい
です、って」

「う、うん……」

(決まっちゃった……)

(僕、本当にこれから、あの制服を着て、△学校に——)

考えるほどに、不安が膨らんでくる。だが、

「やったあ！ お兄ちゃん、真奈と一緒に学校に通おうね！ 真奈がいろいろ、教えてあげ
る！」

嬉しそうにはしゃぐ妹の姿に、ほんの少し心が軽くなり——

「ふふ、そういうことなら、早めに準備していかないとね。まずは——この入学届に、必
要事項を記入してちょうだいね」

母親に「□等部入学届」の書類を渡されて、真弥はがっくりと肩を落とすのであった。

(続く)